歴史地震
第29号(2014) 261頁

［講演要旨］

元禄地震で発生した土砂災害(神奈川・山梨県域)

株式会社 防災地理調査　今村隆正
立命館大学 歴史都市防災研究センター　北原糸子
アジア航測 株式会社　千葉達朗

§1. はじめに

元禄十六年十一月二十三日(1703 年 12 月 31 日)に発生した元禄地震は、房総半島から神奈川県域及び山梨県東部においても土砂災害を発生させた。

本発表においては、今まであまり調査のされて来なかった丹沢山地や山中湖付近を対象として、元禄地震による土砂災害の実態を解説する。

§2. 皆瀬川村の土砂災害

皆瀬川村は、現在の神奈川県足柄上郡山北町に属し丹沢山地の南端付近に位置する山間集落である。元禄地震による皆瀬川村の被害は甚大であった。「皆瀬川村ぢしんつぶれ家帳」(井上安司家文書)にその被害状況をみることができる。

地震によって、58 軒(村の全ての家屋)が倒壊、流失、あるいは埋没してしまったのである。「家屋敷共無」という記述も含まれている事から、集落背後の斜面が一気に崩れ、家屋も土地も埋没してしまったか、あるいは斜面全体が地すべりを起こして、斜面ごと抜け落ちてしまった現象も発生していたものと考えられる。

§3. 矢倉澤村の二次災害

矢倉澤村は、現在の神奈川県南足柄市に属し、矢倉岳(870m)を源頭に流れ出る急勾配な渓流、北沢の扇状地に発達した集落である。矢倉澤往還が村を通っていたため、早くから関所が置かれた山間交通の結節点となる村であった。

この村には、元禄地震により発生した山崩れとその後の降雨による二次災害の発生を知ることができる大変貴重な史料が残されている。

田代克己家文書(図 1)によれば、元禄地震で山崩れして、北沢の上流部に堆積していた土砂や、亀裂の入った不安定な斜面がその後の降雨で崩れ、土石流となって流下し、家屋や馬屋 9 軒が被災し、村の田畑の半分が流失した。更に無田岸兵衛と女房、無田孫作の母の 3 人が川に流されて犠牲になった。この様な記述から、地震後の降雨による土石流の発生で、大災害が発生していたことが分かる。

図 1 「乍恐書付を以御注進申上候事」
(南足柄市郷土資料館、田代克己家文書)

§4. 桂川沿岸の地震被害

相模川の上流に当る、桂川沿岸に沿って点在する大月村、猿橋村、鳥澤村(現在の山梨県大月市)においても、元禄地震による土砂災害の記録が確認される。元禄地震とその翌年宝永元年の降雨によるものと考えられる被害で、田畑の崩れや流失などの被害が発生したことが、年貢減免願から確認できる。

これらの被害地域に共通するのは、桂川の攻撃斜面に位置する段丘上の土地ということである。元禄地震の激しい揺れとその後の降雨も加わって、土地の一部が崩落・流失してしまったものと考えられる。

§5.土砂災害による平野村の移転

元禄地震では、富士山麓の山中湖付近でも、大きな被害が発生した。平野村に残された当時の年貢減免願などから、その痕跡を探ることができる。

山中湖の東北端に位置する平野村は、現在の古屋敷と呼ばれる谷に存在していたといわれ、一村の大半が元禄地震により発生した山崩れで埋没し、集落や寺院(寿徳寺)の全てが現在地へ移転したことが分かった。古屋敷の谷の最奥には明瞭な山崩れ跡地が確認されることから、これが元禄地震の激しい地震動で一気に崩れ、その崩壊土砂が一瞬にして、直下にあった平野村の集落を襲ったのであろう。そして、地震の発生が夜中(深夜2時頃)であったため、人々は避難する間もなく土砂にのみ込まれてしまったものと考えられる。